

神石高原町読書感想文コンクール入賞者決定!

町では読書への関心を高め、積極的・自主的に本を読むきっかけづくりとして、8月を「神石高原町読書月間」と定め、読書感想文を募集し497点の応募をいただきました。

その作品の中から、各部門の最優秀賞・優秀賞を選び12月1日、小説「黒い雨」にゆかりのある志麻利で開催された読書のついでで、表彰者に賞状と記念品が贈られました。入賞者は次のみなさんです。

- 【小学生の部】** 最優秀賞：横峠 裕太 (来見小5年)
 優秀賞：後藤 優輝 (来見小3年)
 〃：岩田 菜日琉 (油木小4年)
 〃：金山 晃士 (神石小5年)
 〃：當田 詩織 (油木小6年)
- 【中学生の部】** 最優秀賞：金山くるみ (神石中1年)
 優秀賞：山村 萌衣 (豊松中2年)
 〃：池田 健峰 (三和中3年)
- 【高校生の部】** 最優秀賞：矢迫野乃佳 (上下高1年)

- 【黒い雨の部】** 最優秀賞：武田美佐子 (府中市)
 優秀賞：山本 敬子 (三和中2年)
 〃：長松美登鯉 (広島市)
 特別賞：武田野々花 (府中市国府小5年)
 〃：玉田 菜那 (高砂市白陵高1年)
 (敬称略)



—「黒い雨」の部で親子で応募し、ともに受賞された作品のうち、最優秀賞に輝いた作品を紹介します。—

「開かずの扉」《最優秀賞》府中市 武田 美佐子

「伯母ちゃんは国鉄に勤めようたけえね。八時十五分頃に来る電車で乗ろうってね。横川駅の裏辺りにおいたら飛行機が低う飛んで来たけえ、あれ?と思って日傘を閉じたんよ。その瞬間に…」

法事でしか会う事のない伯母に電話したのは、私が「黒い雨」と向き合う決心をしたからだった。

八月六日の事を聞こうと幼い頃、祖母のガラスが入ったままの足をさすりながら「ねえ」と何度か試みたが、私の祖母は「うちは、話さんの。」と、一度も私に当時の様子を語ることなく天国へと旅立った。「つらい思い出を掘り返すのはやめよう。」私は被爆二世であることを背向いながらも原爆の話を家族とすることがないまま大人になった。とはいえ結婚する時「子どもが被爆三世になるけどいい?」と彼に確認する程、「被爆一家」という事実が私の中に重くのしかかっているのは確かだった。

子どもが成長し「私は被爆三世」と、あどけない笑顔で友と話す娘の姿を見た時、どうやって原爆のことを伝えていくべきかとまどった。

そんな時、私は仕事で「黒い雨」に触れる機会に恵まれた。娘と一緒にこの本を読もうと思った。図書館で文字の大きな本を借りた。

すると——。重松が目にした風景の中に私の家族の姿が見えた。横川。真に私の祖母や当時一歳だった父が暮らしていた辺りだった。

あまりの驚きに、何ページか読んだところで親類に電話してみた。「嫌なら話さんとね。」前置きをして、「今、黒い雨を読んでいて…」と切り出してみた。当時四歳だったという千代子伯母さんは「土壁が倒れてきてね。はい出したんよ。あんたのおばあちゃんの家が前じゃったけえね。おばちゃん、大変よ。ゆうて言いに行ったら、あんたのお父ちゃんの服着がえさしようちゃってね。待つときんさいゆうて言われた所だけしか覚えとらんのものよ」と話してくれた。「吉見の伯母さんが一緒に住みようちゃったから、伯母さんに電話してみんさい。」千代子伯

母さんにすすめられたが私は少々とまどった。「本当は皆、話したくないのではないか?」そう思ったからだ。

翌日。「黒い雨」を読み進め、やはり私は決心した。「黒い雨と向き合うためにも我家の歴史と向き合おう」と。吉見の伯母に電話をかけた。「時が話せるようになってくれたんかねえ。」伯母は、突然の電話にもかかわらず、六日の出来事を話してくれた。吉見の伯母が乗ろうとしていた電車は、まさしく重松が乗っていた電車そのものだったと想像できた。伯母はその電車を目指し家を出たものの「間に合わない」と思い引き返し始めていた所だったと言う。「B 29 が来たら伏せると言う練習をしとったからね。三條小学校の上を大きな飛行機がかすめたから、皆、B 29 じゃって腹ばいになったんよ。キラッと光ったら熱風が地をはうように来たけえ、皆、熱風でやけどしたんよね。知らんわいね。あの飛行機が何を落とす行ったかなんか、わからんわいね。ああ、これがB 29 の空襲か思うよね。」伯母の話は「黒い雨」の一節ではないかと思う程リアルだった。私の祖母に「進ちゃんを頼んだよ。」と言われ、父の兄の手を引き避難所を目指した事。避難所にたどり付く手前で雨が降ってきた事。結局避難所は満員で、千代子伯母さん宅の防空壕で一夜を明かした事。受話器の向こうの伯母の話は「もう一つの黒い雨そのもの」だった。

「お母さん。どうしたの?」一緒に読もうと誘った私が受話器をにぎり涙する姿に娘も驚いていた様子だった。「黒い雨を読んでいるのか、おばあちゃんが見てきた景色をたどっているのかわからなくなってきたね。」

私達親子は「黒い雨」をきっかけに、我家の原爆体験という開かずの扉を開けることができた。

受話器の向こうから聞こえてきたストーリーを書き留めるのは私の役目だ。重松があの日のことを日記に書き起こしたように——。

*『大型活字本シリーズ 黒い雨 上・下』
(井伏 鱒二・著/埼玉福祉会・刊)



初登庁 (職員代表から花束を受け取る牧野町長)

このたび、町民の皆さまをはじめ各方面からの強いご支援と温かいご厚情を賜り、3期目の町政を担わせていただくこととなりました。
このうえは、皆さまからお寄せいただきました信頼と期待にお応えすべく「誰もが住みたい、住んでみたい町づくり」に誠心誠意全力を傾注してまいります。所存でございます。
今後とも一層のご指導とご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

神石高原町長 牧野 雄光

町長就任のあいさつ

新町議会議員を紹介します

(議長・副議長以外は議席順に掲載しています) ※敬称略

なお、第4回神石高原町読書感想文コンクールの作品は、審査委員長 血海達哉 (ふくやま文学館館長) さんに講評していただきました。また、全体の優秀作品集・総評を町ホームページに掲載しています。